

エレベーター

芳田尚哉

エレベーター

カズマとユウゴは、友達が住むマンションに向かうため、自転車で向かっていた。

「あのマンション、いつ見てもでかいよな……」

カズマは坂の麓に位置する目的のマンションを見る。ここが都会であれば普通なのだろうが、他に高い建物が無いこの場所では、一二階建てのマンションは、異様なほど高かった。

坂が多く戸建てが並ぶこの街で、マンションといえばここ——というほど目立った建物だった。

「そうだよな。後ろの山が見えないくらいだぜ」

『最近この周辺で、不審な失踪事件が続いております。なにかお気づきの方がおられましたら、警察までご連絡をお願いします』

パトカーが住民に呼びかけながら走っていく。

「不審な失踪事件だってよ」

「カズマ、お前もしかしてニュース見てないのか？ 何度もやってるだろ」

「見てない」

「即答かよ。っていうか、ニュースサイトくらい見るだろ」

ユウゴもテレビで見る事はなくても、携帯電話——スマートフォンでチェックしている程度だった。

「それくらいは見るぞ。野球の結果とか、気になるだろ」

「スポーツだけかよ」

「……そのくらいだな」

カズマは少し考えてから答える。

「なんで今、ちょっと考えたんだ？」

「いや、言われてみればそうだな……って」

「そうかよ。まあ、テレビでも話題になってるぜ、行方不明が続いてるんだってよ」

「それって、みんな夜逃げとか？」

「そんなわけあるか」

そんな会話をしていると、目的のマンションに到着した。

二人はマンションの駐輪場に自転車を停めると、エントランスに入っていく。

エントランスの奥にあるエレベーターの扉が閉まりそうになっており、二人は待つて下さいと叫びながら走る。

「ありがとうございます」

ユウゴは息を整えながら、ボタンを押してくれていたサラリーマンにお礼を言う。

エレベーターの中には、八人の男女が乗っており、エレベーターはほぼ満員だった。

ボタンを押してくれた四〇代くらいのサラリーマンの他に、小さい男の子と女の子を連れた母親、大学生くらいのカップル、そして老夫婦が乗っていた。

「えっと……九階九階」

そう言いながら、カズマは目的の階のボタンを押そうとするが、すでに誰かが押していた。

ゆっくりと扉が閉まり、エレベーターはゆっくりと上昇していく。

他に高い建物がないという事で、このエレベーターは外の景色が見れるように、一面だけガラスになっていた。

子どもたちは、かぶりつくように外を見ている。

「すごいよ、すごい」

「ほんとうだ。すごいね」

エレベーターが動くと、子どもたちがはしゃぎだす。

「こら、静かにしなさい」

慌てて母親が注意する。

「ママ、すごいんだよ」

「すごいんだよ」

それでも子どもたちは、外を見てはしゃいでいる。

「もう、静かに……えっ？」

注意していた母親が、外の景色を見て言葉を失う。

「どうなってるの？」

その声に外を見た大学生カップルの彼女が彼氏に言う。

その頃には、全員が外を見ていた。

「なあ、俺の目がおかしくなったのか？」

カズマがユウゴに訊く。

「いや、たぶんみんなそうだと思う」

二人はもちろん、乗っていた全員が騒ぎだしていた。

普通ならば外には、遠くの景色が見えるはずだ。しかし、景色が横に流れている。それだけでなく、明らかに住宅街の真ん中を通っている。

「どうなってるんだよ」

カップルの男が叫ぶ。

誰もが同じ気分だった。

ぐるりとマンションを回るように動いていたエレベーターは、見えないレールを通るかのよう、坂に沿うように上っていく。

「出してくれ」

サラリーマンがボタンを連打する。しかし、エレベーターはゆっくりと上り続ける。

子どもたちは、ガラスに張り付いて楽しそうにしているが、大人たちはなんとか扉を開けようとしていた。

「くそっ、開かないぞ」

「まあ、簡単に開いても困るんだらうけどな」

カズマとユウゴは、どこかのんびりしていたが、サラリーマンは限界だった。

「まったく、開けよ、こんちくしょう！」

扉を蹴りつける。

「ちょっと静かにしたらどうだい」

老紳士がたしなめる。

「うるさいな！ あんたはなんとも思わないのか。ええっ？」

「ここで扉が開けば危険だと思わないか？ エレベーターが止まるのを待ってもいいだろう」

「……………」

サラリーマンは反論できなかった。

ちょうどその時、エレベーターの階表示が `2` に変わった。

チンと音を立て、エレベーターが止まる。

「やった」

サラリーマンは、ようやく出れると、扉が開くのを待つ。

「おい、大丈夫か？」

カズマは扉から離れる。

「どういう事だ？」

「すぐにわかるって。俺の予想だと、大変な状況だと思うぜ」

ユウゴはハテナを浮かべる。

ゆっくりと扉が開いていく。

「これで……うわっ」

一歩踏み出したサラリーマンの姿が消える。手だけが、エレベーターの縁にあった。

「落ちる。助けてくれ」

やっぱりなと呟きながら、カズマが扉に近付く。ユウゴも恐々と近付く。

「うわっ」

ユウゴは思わず後ろに飛びのく。

エレベーターは空中に浮かんでいるので、サラリーマンは落ちそうになっていた。

「大丈夫ですか？ 誰か、手伝ってください」

カズマの呼びかけで、カップルの男と老紳士がサラリーマンの手を掴んで、なんとか引き上げようとする。

「ユウゴも手伝ってくれ」

「お、おう」

ユウゴも慌てて参加する。

「うわっ、な、なんだっ」

サラリーマンは妙に慌てている。

「じっとしてください」

カズマがそう言うが、サラリーマンはなにかから逃げるように暴れる。そのせいなのか、掴んでいた手がすっぽりと抜けて、サラリーマンは外へ落ちて……いや、引き込まれてしまった。

「お、おい、どうなってんだよ。あのおっさん、どうなったんだよ」

カップルの男がしりもちをついて怯える。

「わからん。だが、どうやら出ない方がいいみたいだな」

老紳士が答える。

「なあ、どうなってるんだよ」

「俺にわかるわけないだろ」

ユウゴとカズマも、目の前で起こった事態に怯えていた。

そんな気持ちをよそに、エレベーターの扉が閉まり、再び移動し始める。

誰もが扉から離れていく。

恐怖に支配されたエレベーターは、やがて四階に止まった。

「お、おい、また止まったぞ」

カップルの男が震えながら言う。

自然と全員が、エレベーターのボタンを見る。四階のボタンが点滅している。他に押されているボタンは、七階と九階。

「ど、どうしよう……」

母親がガタガタ震えている。

扉が静かに開くが、誰も近付こうとしない。

「このまま閉まって」

母親は手を合わせて祈っていた。

「お、おい、誰かあのボタンを押せよ」

カップルの男が、エレベーターの「閉」ボタンを指す。

「だったら、君が押しなさい」

「じじいが押せよ。俺はまだ死にたくないんだよ」

「最近の若者は……」

「あなた、危ないわよ」

老婦人が止めるが、大丈夫だよと答え、扉に近付いていく。

誰もが息をのんでそれを見守る中、老紳士はボタンを押す。

……………しかし、扉は閉まらない。

「閉まりなさい」

何度もボタンを押すが、扉は開いたままだ。

「どういう事だ」

老紳士が驚く中、母親がなにかに引っ張られるように外へ飛び出していった。それは誰にも止める事ができない、あつと言う間のできごとだった。

啞然としていた乗客たちだが、子どもの泣き声で我に返る。と同時に、扉が閉まって移動し始める。

「うるせえんだよ、ガキ」

カップルの男の怒声に、子どもたちはさらに泣き出す。彼女の方が、やめなよ……と言うが、この状況のせいだろうか、なにかに八つ当たりしたくてしょうがなかった。

老婦人は子どもたちをあやして、なんとか泣きやませようとする。

「どうやら、本来降りようとする階で降ろされるようだな」

老紳士が状況を確認する。

「じゃあ、あの人が……」

カズマの確認に老紳士が頷く。

押されているボタンは七階と九階だ。

「それじゃ、七階は……」

老紳士はカップルを見る。

「お、おいおい、マジかよ。俺は降りないぞ。ぜってえ、降りないぞ」

男はガラスに張り付く。

「無駄だと思うよ。さっきの人もそうだったじゃない」

カズマが現実を突きつける。

「そんなの嘘だ。俺は降りないぞ」

男は情けなく泣く。

そうしていても、エレベーターは目的の階に到着する。

扉が開いていくと、男は喚き泣き出す。

彼女は怯えながらも、そんな彼氏を冷めた目で見ていた。

もう誰も扉に近付かない。ボタンを押しに行こうともしない。ただ、泣き喚く男だけを見ていた。

「お、おい、誰か助けてくれよ。俺は死にたくないんだよ。……………うおっ」

突然、男はなにかに引きずられていく。

「やだ。死にたくない。死にたくないんだ」

なにかから逃げようとずるが、どんどん引きずられていく。

「助けてくれよ」

男はとっさに彼女を掴む。

「やだ。離して。離してよ」

彼女はその手を振り払おうとするが、男は必死に掴んで離さない。

「ちょっと、冗談じゃないわよ。あんたみたいなのと一緒に死ぬなんて最低」

「一緒に来てくれよ。俺たち恋人だろ」

「もうあんたなんかとは別れる。だから離して」

そんな事を叫びながら、男に引っ張られ女の方も外へ連れ出されてしまった。

扉はゆっくりと閉まる。

「……どうなってるんだ？」

カズマが呟く。

「どうしたんだ？」

「不思議じゃないか？」

なにが？ とユウゴは首を傾げる。

「あの母親の時もそうだったんだけど、さっきもあの男の方だけだっただろ。彼女の方は、なにもなかった。どういう事なんだろう？」

ユウゴには、そのなにが不思議なのかすらわからない。

そんな疑問に答えたのは老紳士だった。

「おそらく、ボタンを押した本人だけなんだろう」

カズマは老紳士を見る。

「それって……」

「おそらく、ボタンを押した本人だけじゃないだろうか。あの二人は乗った時にボタンを押したんだよ」

それを聞いて、カズマは大きく頷く。

「じゃあ、他の人はどうなるんだ？ 俺ら、押してないよな」

「それもそうだけど、九階を押したのって……」

「家内だよ」

老紳士は子どもをあやしている婦人を見る。今度は自分の番だというのに、冷静に子どもをあやしている。

「それじゃ……」

そんな話をしている間に、エレベーターは九階に到着する。

「ごめんね。あのお兄ちゃんたちが、なんとかしてくれるからね」

老婦人は子どもの頭をなでて、カズマたちを見る。

「この子たちをお願いしますね」

老婦人が優しく笑いかける。

「えっ？ 俺たち？」

「……………」

ユウゴとカズマが動揺する。

「どうしてそんなに落ち着いてるんですか」

カズマが訊く。

「どうなんでしょうね。落ち着いているように見えるんですね」

そう言いつつ、老夫婦は二人で扉の前に立つ。

それを待っていたかのように、ゆっくりと扉が開いていく。

「どうして二人で……」

「いつも一緒なのは当然だろ」

「すみませんね、あなた」

カズマの問いに、ゆっくりと答える。その表情に迷いはなかった。

「それじゃ、行こうか」

「はい」

二人は顔を見合わせ、ゆっくりと外に足を踏み出す。

！

最後まで踏み出す事なく、なにかに掴まれるように引っ張られていく。

「そんな……」

ユウゴはぺたりと座り込む。

「……どうしよう」

カズマもどうすればいいのかわからない。子どもたちは、二人を見上げる。

「おい、どうすんだよ」

エレベーターの扉がゆっくりと閉まっていく。

ゞご利用の階を押して下さい、

機械の無機質な声が響く。

「おい、どうするんだよ。ボタン押せって……」

「このまま、ここにいるわけにもいかないよな」

カズマは下に向かうために、一階のボタンを押そうとする――が、

「おい、地下ってなんだ？」

いつものエレベーターならあるはずのない地下フロアのボタンがあった。

「とりあえず、地上に戻ろうぜ」

「そうだな。……じゃあ、押すぞ」

カズマは意を決して一階のボタンを押す。

ゞ下にまいります、

エレベーターはゆっくりと下に向かって移動し始める。

景色が今までとは逆に流れる。

「俺たち、戻れるんだよな」

「多分な。この子たちだけでもなんとかしないと」

カズマは子どもたちを見る。二人は手をつないで、じっと外を見ていた。

「でも、母親が……」

「……そうだった」

この子たちの母親が外に連れ出された瞬間を思い出す。

「でも、あの二人に頼まれたしな」

「外に出れたら、警察に行こう」

「信じてくれると思うか？」

カズマは首を振る。

「俺なら信じれないな。ぶっ飛びすぎてる」

「だよな。俺も無理だ」

相談していると、エレベーターは目的の階に到着した。

「よし、これで外に……っ！」

扉がゆっくりと開くと、そこはマンションのエントランスではなかった。

「どこなんだよ、ここは」

目の前には巨大な手が。

その向こうに見えたのは、岩肌と火山だった。

ぐじゃっ！

なにかが潰れた。

それは、自分たちが潰れる音だった。

Fino.

エレベーター

<http://p.booklog.jp/book/111382>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111382>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト